

# 集

俳句フォーラム

2020年1月 第74号

白山句会

今朝の秋

都築繁子

青梅雨の池白鳥の死の告示  
遊具みな濡れくちなしの花の鏝  
揚花火遠い日に似た風の中  
今朝の秋出しを効かせたお味噌汁  
解体の市場見下ろす秋の風

秋立つ

田中藤穂

夏の雨吉村昭文学館  
鱧料理川面は宿の灯を映し  
戦さの日たぐる神田の街酷暑  
秋立つや台所掃除念入りに  
忘れ草忘れな草も時過ぎし

汐留

平野無石

祭待つ村や総出の道普請  
昭和の友また一人逝く松落葉  
海霧晴れし湿原百の水鏡  
汐留の迷路霧立つ亀の水  
秋澄むや鉄道唱歌生れし街

秋の色

植木やす子

笙の音に誘導されて施餓鬼かな  
茄子の牛新たに姉と甥も乗せ  
負の試合逆転勝ちの球児夏  
汐留に働く人や秋の色  
秋澄むや眼下に展く浜離宮

夫病む

工藤はる子

また病追ひかけてきて秋暑し  
病院にサフランの白重なりて  
血管の青さ確かむ指冷やか  
病告ぐ医師の白衣や秋湿り  
これからは楽しく生きよう秋の虻

回轉扉

篠田純子

回轉扉入るに逡巡秋暑し  
水上バス離宮に入るや秋の潮  
牧場のソフトクリーム濃し旨し  
夏草にひかる雨粒玉・勾玉  
図書室の静寂守るや梅雨長し

停車場

大山夏子

路面電車人に寄り添う薔薇の花  
眼帯を外して梅雨の文学館  
大花火束の間亡夫の残像  
秋暑かな市場解体眼下にし  
汽笛一声停車場の秋うらら





藤の会

ゴーヤ

渡辺節子

二階まで昇るあっぱれゴーヤの子  
忘るまじ玉音放送聞きし昼  
栗焼耐乱るる心包み込む  
瓦礫の山割ってたくまし夏の草  
台風で一網打尽ゴーヤ蔓

不協和音

大山夏子

大甕のなかに浮き草接骨院  
一灯もなき島に居て天の川  
銀座通り秋七草のやや寂れ  
風立ちて銀杏一つ落ちし音  
身辺の不協和音や秋暑し

栗の花

中川のぼる

青臭く生きて来たのか栗の花  
半跣思惟すれば秋暑も柔和なる  
濁り酒恥に拘る老いてなお  
秋の雲銀座に恋のありし日を  
虫籠の空き家となりて思い出に

銀河

江口九星

晴天も我が人生と銀河かな  
夏の宙ドボルジャークの新世界  
炎暑かな蟻は将来見据いる  
宵待ち草人の出会いの不思議かな  
人の世も降らず降らずみ梅雨流し

乱気流

伊藤昌枝

熱気球に乗る夏空の乱気流  
夜濯ぎのまだ張り詰めし柔道着  
白桃を嬰兒抱くように両の手で  
秋深む銀廢坑の水たまり  
風の盆みやげにもらう手漉き和紙

青蛙

楠本和弘

千年の杉の靈氣を青蛙  
捕虫網空に背伸びの兄妹  
空蟬が聞く分身のうたう声  
地獄門に絡めとられし鬼やんま  
上げ潮に鱈高々と銀の反り

稲穂

吉宇田麻衣

初めての稲穂落とさぬよう束ね  
秋の寺急なスコール待つ子泣く  
目高鉢見つけた吾子の手を引いて  
軒先に鬼灯吊らる隣家かな  
サイクリング蜻蛉の群れと高原を

脳細胞

渡部恭子

柔らかかき脳細胞や桃を剥く  
ひと言を悔いてボサノバ梅雨長し  
立葵明日の英気を掴みゆく  
集く虫嬉しくもあり哀しくも  
ペアグラスの一つに色なき風を入れ

水琴窟

小沢えみ子

乱立するガラスの窓の大夕焼  
盆の寺風の和らぐ日暮れかな  
父に酒母に玉露の墓参り  
しんと鳴る水琴窟や秋うらら  
大野分なぎ倒しゆく自転車も

ムーミン村

酒井たかお

振花の鉢なども売る花やかな  
押し鮎を開き越中ほのかなり  
太陽をぎゅうと詰め込む西瓜かな  
ムーミン村絵本の中を歩く秋  
大川の倂浮かぶ月今宵



円の会

故郷

重原爽美

目葉の一滴に得し爽快感  
ふるさとを離れ老いたり秋彼岸  
ふるさとや近くて遠し秋彼岸  
萩くぐり不在の彼の家を過ぐ  
囲まれて虫のすだくに月仰ぐ

終の一花

大山夏子

六月は雨の匂いや母修す  
旅先で齡重ねし額の花  
みんなの初鳴き上り坂途中  
くちなしの花錆び亡き友偲びけり  
醉芙蓉の終の一花と酔うており

青薄

石川東兎

長梅雨や我を立て通す理は妻に  
海芋咲く白てふ色のなき深さ  
五月闇忘れごととして家を出る  
熟れ落ちる寺の実梅や僧老いて  
青薄切りし傷みの懐かしく

筆不精

山田邦彦

夏の日や夜は正しき波の音  
七月の沖雲溶かす海の色  
百日紅昔も今も筆不精  
千切れては雲が雲追う馬柵の秋  
母の声聞いた気がする秋の空

秋の蟬

日置游魚

うたた寝や画面に不思議な海月浮き  
踊り場に昨日のかなぶん裏返る  
満月を押し上げ大楠の自在境  
短夜の悪夢一日引きずって  
突けば飛ぶ哀れ七日目の秋の蟬

アマリリス

仁上博恵

昭和史をテレビのなかに探す夏  
三代目で廃業となるアマリリス  
青春はアングラ時代仏桑花  
馬車道てふ街路を飾るアガパンサス  
コンクリの割れ目に芙蓉通り雨

猫

小笠原妙子

もう返事せぬ猫の尻尾や梅雨の闇  
魂棚の馬が転がり亡猫来  
梅干しに影一つずつ裏返す  
秋生るる高校野球果てし空  
男衆手振り煽やか盆踊

冷素麺

三羽永治

氷菓の山分かち合ひたる日は遠く  
清流に揺れ梅花藻の咲き継ぎぬ  
屈託もするりと啜り冷素麺  
漆黒の校舎の廊下蝉時雨  
恋談義続き手つかぬ冷奴

異常な夏もあと少し

治部少輔

東海道の品川宿や炎天下  
子供らの遠ざかる声藪蚊たつ  
瀬音速し若き岩魚の影もまた  
峡谷には峡谷の空石清水  
日照不足彩足らぬ夏野菜

だるい風

三柵 敦

さわやかな笑顔の別れエアポート  
樹に草に晩夏のだるい風の音  
月光を焦がれて飽いて実むらさき  
月光の紅葉明かりの中にある  
とんぼうの空ジェット機の雲伸びる

秋日傘

中山未奈藻

いくたびも歩を止め見回す瑠璃蜥蜴  
鶴島亀島枯山水の滝の音  
背を越さる孫の足音夏座敷  
昨日より声のととのう油蝉  
卒寿の母の左手白し秋日傘